

1. ついで主はモーセに仰せられた。
「アロンの子である祭司たちに言え。彼らに言え。
縁者のうちで死んだ者のために、自分の身を汚してはならない。
2. ただし、近親の者、母や父、息子や娘、また兄弟の場合は例外である。
3. 近親の、結婚したことの無い処女の姉妹の場合は、身を汚してもよい。
4. 姻戚の縁者として身を汚し、自分を冒瀆することになってはならない。
5. 彼らは頭をそってはならない。
ひげの両端をそり落としてもいけない。
からだにどんな傷もつけてはならない。
6. 彼らは自分の神に対して聖でなければならない。
また自分の神の御名を汚してはならない。
彼らは、主への火によるささげ物、彼らの神のパンをささげるからである。
彼らは聖でなければならない。
7. 彼らは淫行で汚れている女をめとってはならない。
また夫から離婚された女をめとってはならない。
祭司は神に対して聖であるから。
8. あなたは彼を聖別しなければならない。
彼はあなたの神のパンをささげるからである。
彼はあなたにとって聖でなければならない。
あなたがたを聖別する主、わたしが聖であるから。
9. 祭司の娘が淫行で身を汚すなら、その父を汚すことになる。
彼女は火で焼かれなければならない。
10. 兄弟たちのうち大祭司で、
頭にそそぎの油がそそがれ、聖別されて装束を着けている者は、
その髪の毛を乱したり、その装束を引き裂いたりしてはならない。
11. どんな死体のところにも、行ってはならない。
自分の父のためにも母のためにも、自分の身を汚してはならない。
12. 聖所から出て行って、神の聖所を汚してはならない。
神のそそぎの油による記章を身につけているからである。わたしは主である。
13. 彼は処女である女をめとらなければならない。
14. やもめ、離婚された女、あるいは淫行で汚れている女、これらをめとってはならない。
彼はただ、自分の民から処女をめとらなければならない。
15. 彼の民のうちで、その子孫を汚すことのないためである。
わたしは彼を聖別する主だからである。」
16. ついで主はモーセに告げて仰せられた。
17. 「アロンに告げて言え。

あなたの代々の子孫のうち、

だれでも身に欠陥のある者は、神のパンをささげるために近づいてはならない。

18. だれでも、身に欠陥のある者は近づいてはならない。

目の見えない者、足のなえた者、あるいは手足が短すぎたり、長すぎたりしている者、

19. あるいは足や手の折れた者、

20. くる病、肺病でやせた者、目に星のある者、

湿疹のある者、かさぶたのある者や、こうがんのつぶれた者などである。

21. 祭司であるアロンの子孫のうち、

だれでも身に欠陥のある者は、主への火によるささげ物をささげるために近寄ってはならない。

彼の身には欠陥があるから、神のパンをささげるために近寄ってはならない。

22. しかし彼は、神のパンは、最も聖なるものでも、聖なるものでも食べることができる。

23. ただし、垂れ幕の所に行ってはならない。

祭壇に近寄ってはならない。

彼は身に欠陥があるからである。

彼はわたしの聖所を汚してはならない。

わたしがそれらを聖別する主だからである。」

24. モーセはこのように、アロンとその子らとすべてのイスラエル人に告げた。

説教

レビ記 21 章は祭司と大祭司に対する神さまのご命令です。ここで神さまは、葬儀(1~6, 10~12 節)と結婚(7~8, 13~15 節)について、家庭生活(9 節)について、さらには祭司として奉仕することのできる資格(16~23 節)について教えておられます。これらの教えは、18 章から 20 章に於けるイスラエルの民全体への教えに付け加える形で教えられたものです。

神さまのお恵みによって聖なる神の民とされたイスラエル一般に対して、神さまはこの世の倫理基準を超える生き方を要求なさいました。そして、イスラエルの民を教え導く使命と責任とを委ねられた大祭司と祭司には、それをまた超える倫理基準を神さまは要求なさるのでした。

この世の人々は神の民イスラエルの生きざまを通して聖なる神の栄光を見ますが、イスラエルの民は祭司の生きざまを通して神の栄光を見ます。それほど祭司の霊的影響力は強く、責任は重大なのです。それで、人一倍厳しい倫理基準で生きることが要求されたのでした。

後にイエスさまはこのことを次のように平易な表現で教えてくださいました。「**すべて、多く与えられた者は多く求められ、多く任された者は多く要求されます。**」(ルカ 12:48) 使徒ヤコブもこの事実を次のように教えました。「**私の兄弟たち。多くの者が教師になってはいけません。ご承知のように、私たち教師は、格別きびしいさばきを受けるのです。**」(ヤコブ 3:1)

人々の罪を贖い人々に律法を教える神の栄光をあらわすべき祭司は、自らの生活を聖別し、この世で最も聖なる生き方をすることが求められたのでした。

まず、葬儀に関して、自分の親しい身内の者以外の葬儀に関わってはならぬことが祭司に教えられます(1~4)。そして、身内の死を悲しむ余り、頭を剃ったり、髭の両端を剃り落としたり、自分のからだを傷つけてはならない

ことが教えられます(5)。この世では、身内の死を悲しむことが、死者への弔いであったり、世間への証しであったりします。しかし、神の祭司はそんなことにうつつを抜かして、神さまから委ねられた自らの使命を忘れてはならないのです。すなわち、どんな時にも、たとえ悲しみのどん底に突き落とされた時にも、いけにえをささげて神の御名の栄光をあらわすべき自らの聖なる使命を忘れてはならないのです(6)。

大祭司の場合にはさらに厳しく、たとえ自分の父や母であっても、葬儀に関わることも、髪の毛を乱し装束を引き裂いて悲しみを表現することさえ許されず、あくまで聖所に於ける自らの職責を全うし続けることが要求されます(10-12)。

同じ教団の教師であられた鋤柄和明牧師の話を聞きました。鋤柄先生は、若い時に奥様を亡くされました。奥さまが召された後もずうっと再婚なさらず残りの生涯を終えられたということで、理想的な牧師として有名です。奥様がずうっとご病気で寝たきりだったためご自宅で看病し、最後に召されたのは土曜日だったそうです。鋤柄先生は、そうした中で、翌日の主日の説教をいつものように準備し、いつものように、何事も無かったかのように、礼拝で淡々と説教してから、最後の報告の時に初めて教会員たちに奥さまが召されたことを報告なさったそうです。そういう話を聞くと、自分の妻が死んで何だか冷たいじゃないかと思える人はいらっしゃるでしょう。韓国では、人が死ぬと、どれだけ嘆き悲しむかでその人への愛情が計られるので、無理してでも嘆き悲しみます。でも、そのようなことを律法は禁じるのです。

勿論、人が死ねば悲しいです。それが自分の親や兄弟、妻、夫、身内であれば、どんなに悲しいことでしょう。ダビデは、自分の息子アブシャロムが死んだ時に、死ぬほど悲しんで、自分が息子の身代わりに死ねばよかったとあたりかまわずに泣き叫びました。このような心から嘆き悲しむ感情は、人間なら誰でも逃れられないことです。でも、であればこそ、つまり悲しむ感情は黙っていても爆発するほど自然な感情なのだから、律法はあえてそれと異なることを命じます。すなわち、神の栄光をあらわす祭司としての使命を忘れるな、というのです。

6節で「彼らは聖でなければならぬ」ということが繰り返し強調されます。

6. 彼らは自分の神に対して聖でなければならぬ。

また自分の神の御名を汚してはならぬ。

彼らは、主への火によるささげ物、彼らの神のパンをささげるからである。

彼らは聖でなければならぬ。

祭司は聖だ、聖でなければならぬ、祭司は聖なる者だ、といいます。つまり、祭司は世の人とは違う、というのです。神さまのものです。神さまに属し、神の側に立って、神の栄光をあらわす権威と責任を帯びています。身内への忠誠を誓ったり、世に媚びたり、あるいは自分の感情の虜になってはなりません。祭司はあくまで神のしもべなのです。そして、「主への火によるささげ物、神のパンをささげ」て神の栄光をあらわさなければなりません。罪の赦しと永遠のいのちの恵みを宣教する責任があるのです。それなのに、この世の人々と同じく、ただ身内の死を嘆き悲しむだけでは情けない、自らの使命を忘れるなということでしょう。

次に、神さまは祭司の結婚について教えます。

7. 彼らは淫行で汚れている女をめぐってはならぬ。

また夫から離婚された女をめぐってはならぬ。

祭司は神に対して聖であるから。

「淫行」と訳されているのは「姦淫」の意味で、「売春」にも使われます。売春婦や離婚された女との結婚は禁じられますが、夫と死別したやもめとの結婚は認められます。しかし、大祭司の場合にはさらに厳しく、「離婚された女」「淫行で汚れている女」は勿論のこと「やもめ」との結婚も禁じられ、「彼はただ、自分の民から処女を

めとらなければならない」と繰り返し命じられます(13~14)。そして、その理由を「祭司は神に対して聖であるから」と言います(7)。つまり、神さまへの献身者として神の栄光をあらわす働きをするには、それなりの女性を娶らなければならないというのです。そうしなければ「その子孫を汚す」と言われ、子孫が悪い影響を受けて呪われると言います(15)。結婚相手の条件は、「姦淫してはならない」という神のことばの基準に拠るのです。

これまで18章と20章で「姦淫してはならない」ことの具体的な内容が教えられました。そして、エジプトにもカナンにも姦淫が蔓延していることが教えられました。そのような中で、イスラエルには自分たちが姦淫しないことを通して神の栄光をあらわす責任があります。そして、彼らを教え導く祭司は、自分の結婚を通して「姦淫してはならない」と預言して神の栄光をあらわす責任があるのです。

9節には、「祭司の娘が淫行で身を汚すなら、その父を汚すことになる。彼女は火で焼かれなければならない。」と、祭司の家庭生活についても厳しく教えられます。ここでは娘が取り上げられていますが、息子はやがて父の後を継いで祭司となるため言うに及ばない、ということでしょう。つまり、祭司は、自分の息子をしっかりと教育することは勿論ですが、娘に至るまでもしっかりと教育しなければならないのです。

祭司の娘が姦淫の罪を犯す時には、父である祭司をも「汚す」と言われ、娘は石打ち以上に厳罰である「火刑」に処されます。つまり、このことから理解できることは、祭司には、自分の家庭を一般のイスラエル人以上によく治める責任があるということです。中でも、子どもの教育をしっかりとしなければなりません。この点、アロンは失敗しました。自分の二人の息子ナダブとアビフを教育しきれず、神さまに火で焼かれて殺されました(10章)。祭司エリも、自分の二人の息子ホフニとピネハスをしっかりと教育しきれなかったために、神さまに打たれて戦死しました。イスラエルを教え導いてイスラエルに神の栄光をあらわすべき祭司は、イスラエルを教える前にまずは自分の家族を教え導かなければなりません。この意味でも、先ほどの結婚相手の規定は重要だと思います。みことばにある通り、もしも祭司が姦淫の女を娶るとするならば、「その子孫を汚す」と言われるように、その子どもも悪い影響を受けて姦淫の罪を犯し、火で焼き殺される神のさばきを受けることになるからです。

最後に、神さまは、祭司の奉仕をすることのできる資格について教えます(16~23)。これによると、「身に欠陥のある者」は祭司としての奉仕を禁じられます。ここに列挙される障害はほとんどが意味の確定しがたい難解なものばかりです。例えば、「手足が短かすぎたり」と訳されている言葉は、「鼻、耳、口など、顔に損傷のある者」の意味です。「目に星のある者」と訳されていますが、辞書通りでは「目の中が混乱している、曖昧である」という意味です。とは言っても、これらを含めてここに出て来る単語のほとんどは、稀にしか用いられない単語やこの箇所だけにしか出て来ない単語が多く、その意味は最早明らかではありません。ですから、その翻訳も試案的なものたらざるを得ないようです。いずれにせよここで言われていることは、手にせよ顔にせよ足にせよ、何か特定された類の障害を持つ者は、祭司としての奉仕をするには相応しくないということでしょう。この意味は実に難解なところでは。そこで、いくつか考えられる理由を挙げましょう。

どうしてある特定された障害を持つ者が祭司の働きに相応しくないのか、まず、一つ考えられる理由は、神の栄光をあらわす祭司は、最善、最高の人物でなければならないということでしょう。誰でもいいというわけではない、見た目じゃなく、敬虔さという中身が重要ではあるけれども、中身は見ることはできません。少なくとも、外見上は律法に従って正しく信仰生活を送り、そして、傷無きいけにえを神さまに捧げる祭司も、外見上の傷があってはならないということだと思います。いずれにせよ、神に仕える神への献身者、聖なる祭司は、最善の人物を立てなければならないということでしょう。このことは、後にエゼキエル書の中で、神殿での奉仕が軽んじられるあまり、無割札の外国人に奉仕をさせていることを神さまが非難なさっている事実を思うとよく理解できます。

「あなたがたは、心にも肉体にも割札を受けていない外国人を連れて来て、

わたしの聖所におらせ、わたしの宮を汚した。

あなたがたは、わたしのパンと脂肪と血とをささげたが、

あなたがたのすべての忌みきらうべきわざによって、わたしとの契約を破った。

あなたがたは、わたしの聖所での任務も果たさず、

かえって、自分たちの代わりにわたしの聖所で任務を果たす者たちを置いた。

神である主はこう仰せられる。

心にも肉体にも割礼を受けていない外国人は、だれもわたしの聖所にはいってはならない。

イスラエル人の中にいる外国人はみなそうだ。」

エゼキエル 44:7-9

今日的に言うと、未信者、不信者に教会奉仕をさせているということになります。このことを思うと、神に仕える者には最善の人物を立てなければならないというみことばの趣旨が理解できます。

もう一つの理由は、祭司の働きの性質上の理由です。祭司は、一挙手一投足を人から注目され、人目にさらされながら奉仕しなければなりません。イスラエルの民の中には障害者に理解のある者もいたでしょうが、あからさまに軽蔑する者もいたでしょう。そうしたあらゆる罪深い人々の眼差しに耐えて、祭司は奉仕するのです。それで、神さまは、人々の躓きとなるような障害のある者を祭司としての奉仕から除外なさいました。そして、「非難されるところのない」者を立てるようお命じになったのです。これは決して所謂障害者差別ではないと思います。なぜなら、神さまは、障害者の祭司を、祭司としての身分からは除外なさらず、祭司しか食べることの許されない「神のパン」を食べて生涯養われることをお許しになっているからです。

これは、今日の牧師のつとめも同様です。誰でもこのつとめに耐えられるというものではありません。使徒パウロは、「誰がこのつとめに耐えられるだろうか」と嘆きました。それは、みなさん自身がもしもこの教会の牧師になることを頭に思い浮かべればよくおわかりになると思います。みなさんが、信徒として、あるいは役員としてこの教会に出席しておられるうちは何ともないと思います。でも、一度、この教会の担任牧師になったらどうなるでしょうか。それを好意的に受け止めてくれる人もいるかも知れませんが、「こんな奴は嫌だ、こんな奴が牧師なんて冗談じゃない。こんな若僧の説教聞いてられるか」と陰口を言われ、あからさまに罵られ、プイと他の教会に行ってしまう信徒も少なからずいるでしょう。牧師というのは、そういうあらゆる人々の非難、蔑視、差別、敵意、陰口、罵り、迫害に耐えて、そういうしょうもない、どうしようもない罪人たちを、真正面から受け止めて教え導かなければならないのです。

今日のみことばは、牧師、伝道師、教職として立てられている者にとって参考になります。と同時に、みなさんにとっても重要な指針となります。なぜなら、みなさんもまた祭司であるからです。私たちは祭司の王国です。みなさんは、世界の祝福の基、中心、祭司なのです。しかし、あなたがたは、選ばれた種族、**王である祭司**、聖なる国民、神の所有とされた民です。それは、あなたがたを、やみの中から、ご自分の驚くべき光の中に招いてくださった方のすばらしいみわざを、あなたがたが宣べ伝えるためなのです。

今、もしあなたがたが、

まことにわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るなら、

あなたがたはすべての国々の民の中であって、わたしの宝となる。

全世界はわたしのものであるから。

あなたがたはわたしにとって**祭司の王国**、聖なる国民となる。 出エジプト 19:5-6

ここに集われたお一人お一人の兄弟姉妹が、みことばの通りに、いよいよ自らの生活を聖別して、この罪の世に神の栄光をあらわして生きていかれるよう祈ります。